

## 【特集】新しい日常、そして今後:コロナ禍を経験して —現代行動科学会第37回大会テーマセッションから— コロナ禍におけるネガティブ・ケイパビリティとオープンダイアログ

指定討論 奥野 雅子 (岩手大学)

本テーマセッションでは、4人の話題提供者がそれぞれの職場でコロナ禍と向き合い、それを受け止めて葛藤しつつも、工夫して勤務を遂行されていることがうかがえた。また、新しい日常を模索する中で、プライベートにおいてもさまざまな想いを発信されていたと思う。私たちはそれを受けて自身の生活を振り返り、いろいろな考えや感情が交錯したことだろう。

新型コロナウイルスの感染拡大は容易にコントロールできない事態である。いつ終息するかについても明確な結論を得ることはできない。この状況下で着目したい概念がある。それは「ネガティブ・ケイパビリティ」(帚木,2017)である。答えの出ない事態に耐える力であり、負の力と言われている。何か「できる能力」ではなく、「できない状況を受け止める能力」とされている。一方、ポジティブ・ケイパビリティは、才能や才覚、物事の処理能力であり、問題が生じれば的確かつ迅速に対処する能力である。これは学校教育や職業教育の目的とされている。よって、ネガティブ・ケイパビリティはその反対であり、論理を離れた、どのようにも決められない、宙ぶらりんの状態を回避せず、耐え抜く能力となる。

私たちは自身の人生を生きるうえでわけのわからないことや、手の下しようのない状況は不快である。早々に解答を練り出すか、幕を下ろしたい。しかし、実際、私たちの人生は、どうにも変えられない、とりつくすべもない事柄に満ち満ちているのではないだろうか。したがって、今こそ、ネガティブ・ケイパビリティが必要だと考えられる。

私たちの脳は、ともかく何でも分かろうとする。分からないものが目の前にあると不安で仕方がないのである。分かる基盤は、これまでの記憶であり、分からないものを目にした時、分かるために分類を行うことになる。たとえば、生物を植物と動物に分類するといったことである。さらに、もっとも分かりやすくするためにはマニュアルが必要である。しかし、マニュアルにない事態が起こった時、マニュアルに慣れ切った脳は思考停止に陥る。

そこで、どうにもならないように見える問題を持ちこたえるためにできることがある。それは「オープンダイアログ」(Seikkula & Olson, 2003)であり、開かれた対話と訳される。オープンダイアログでは、結論に執着せず、曖昧な状況に耐えるという不確実性を許容し、話を聞き応答するという対話を行い、様々な立場や価値観をもつ人の意見を大切にすると、多声性を大切にす。すべてのものは変化していく。世の中は無常である。どうにもならないように見える問題も、持ちこたえているうちに落ち着くところに落ち着くことだろう。持ちこたえるためには今ここに集中し、つながりを大切に対話を続けていきたい。

### <文献>

帚木蓬生 (2017). ネガティブ・ケイパビリティ 朝日新聞出版

Seikkula, J., & Olson, M. E. (2003). The open dialogue approach to acute psychosis: Its poetics and micropolitics. *Family Process*, 42(3), 403–418.